博士学位論文審査要旨

２０１５年1月１７日

論 文 題 目：　美容によるがん患者のウエルネスに関する実践的研究

学位申請者：　三田　果菜
審 査 委 員：
　主　査：　総合政策科学研究科　教授　新川　達郎
　副　査：　総合政策科学研究科　教授　今里　　滋
　副　査：　総合政策科学研究科　客員教授　谷口　知弘

要　　旨：

本論文の目的は、がん患者に対して美容施術を用いたサポートを行うことで、罹患しても従前の生活を営み、ウエル・ビーイング（よりよく生きること）を実現することを目指した活動に関して、その理論を構築するとともに、その実証実験を通じて、ソーシャル・イノベーションの可能性を探求することにある。

研究方法としては、理美容の概念を整理し、心身の健康を意味するウエルネスの概念に基づいた実証のための仮説を構築し、学位申請者自身がフィールド経験と理論的世界との統合を手掛ける実践的研究者として、がん患者のための美容室を開設してサポート実験を開始することにした。この社会実験は、アクション・リサーチであり、その経過や成果については、会話記録、写真撮影などの記録を丁寧にとっていくこと、また患者や関係者へのインタビューやアンケート調査を行うことでデータ収集を行い、分析検証を行うこととした。

本論文の第１章では、研究の枠組みを示し、研究に至る背景と問題意識を明らかにし、本研究の目的及び実践研究の手法について論じている。第２章では、本論文の理論的な基礎となるウエルネス概念について、その理論の検討と本研究のための仮説構築を行っている。また、研究の対象となるがん患者の現状についても整理をしている。第３章では、理容・美容と呼ばれる分野の歴史、制度、今日的な位置づけを整理し、本論文の仮説とかかわる社会的役割について論じている。第４章は、美容が持つ「公共」的な機能について論じており、特に、「癒し」の機能の発揮や、生きる力にかかわるエンパワメント（力づけ）の役割を指摘しつつ、それに加えて、理美容の場が人々の公共性を持つ居場所ともいうべき「パブリック・スペース」となりうることを示唆する。第５章は、学位申請者が立ち上げた Happy Beauty Project によるがん患者専門の個室美容室 Ccure（クキュア）の設立と活動実践及び派生して始まった CanBe によるがん患者向けの美容商品開発の成果であるかつら（商品名 Wing Wig）に関する取り組みを報告している。こうした実践から、「がん患者への美容サポートを提供する意義」、「かかわる人々の変化」、「がん患者を後押しする美容」という三つの視点からの社会変革を論じている。第６章では、最終章として、美容術がどのようにがん患者に有効かを示し、ウエルネスの水準向上の効果と理論的な展開可能性を示唆している。

本論文は、美容術を通じてがん患者に生きる力を提供し、そのウエルネスの向上に貢献する活動が、ソーシャル・ビジネスとして実践できるという実験結果を示した点できわめて重要な社会変革への貢献であり、その実践は社会的な広がりが期待できるビジネス・モデルということができる。もちろん、美容術が持つがん患者サポート効果が定量的に測定しにくいところがあること、

限られた時限的なケースに依拠した知見であることなど、研究としては多くの限界があるが、それらは本研究の発見と新たなビジネス・モデル提示の意義を損なうものではない。

よって、本論文は、博士（ソーシャル・イノベーション）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０１５年1月１７日

論 文 題 目：　美容によるがん患者のウエルネスに関する実践的研究

学位申請者:　三田　果菜
審 査 委 員：
　主　査：　総合政策科学研究科　教授　新川　達郎
　副　査：　総合政策科学研究科　教授　今里　　滋
　副　査：　総合政策科学研究科　客員教授　谷口　知弘

要　　旨：

総合試験については、2015 年 1 月 17 日、午後 15 時 30 分より約 1 時間にわたって公聴会を行い、その後、審査を行う形式で実施された。副査のコメントからは、実践研究に関する高い評価が得られた。また、生活の質の改善やウエルネス向上への美容術による貢献について、理論的な観点からの質疑が行われたが、学位申請者はこれらに的確に答えた。外国語（英語）の運用能力に関しては、外国語論文の引用及び解釈が的確であることから、これを確認することができた。よって、総合試験の結果は合格であると認められる。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 美容によるがん患者のウエルネスに関する実践的研究
氏　　名： 三田 果菜

要　　旨：

現在、日本人が生涯がんになる可能性は2人に1人。3人に1人ががんで亡くなる時代と言われている。年間罹患者数はおよそ80万人いるとされ、2030年にはその数字は1.5倍になると国連世界保健機関（World Health Organization, WHO）により発表された。

日本の高度な医療技術により、がんを罹患しても生存率が上がり、昔のように「がんは不治の病」ではなく、「がん≠死」の病気になってきた。

がんになると患者には不安な気持ちや困りごとがたくさん出来る。例えば、女性が最も罹患する確率が高いがんは乳がんで、14人に1人の割合である。年代別では40代に罹患する割合が一番高い。40代と言えばまだ子どもが独立していないし、親のこともサポートしなければならない年代である。また、自身の病への不安はもちろんだが、治療以外のほとんど全てを自力で情報にたどり着き、解決しなければならない。しかも、手術が終わったら全て終わり！ではなく、当事者になってから初めて気付く様々な身体の変化と向き合わなければならない。乳がんの生存率はおよそ90%と高いが、乳がんに限らずともがん患者は再発の恐怖とも闘わなければならない。人生80年と言われている現代で、40代でがんになるということは、残りのすべてを「がんになった」という事実と向き合って過ごさなければいけない可能性もあるということだ。だからこそ「病気になっても笑顔で過ごせる」ように「より良い人生」になるようにしなければならない。

本研究ではHappy Beauty Projectの起業とその一連の実践活動を通じて、美容施術を用いたがん患者のサポートを行うことで、がんになっても今まで通りの生活を営み、よりよく生きる(Well-being)を実現することができるのではないかという問いを、実践プロセスと成果を示した上で、その有効性について明らかにすることを目的に設定している。さらに、理美容所がこれまで地域において果たしてきた地域内交流拠点としての社会的役割について見直し、理美容施術者や理美容所がソーシャル・イノベーションの拠点として機能していく可能性について論じている。

本研究における社会実験において、筆者は「ウエルネス」という視座を導入し、がん患者がよりよく生きることで、毎日の生活を支え、治療の苦しみのなかに置かれても生きるということを支える仕組みの構築が可能かを追求せんとした。そして、すでにがんで身体の健康を損なってしまったがん患者を、美容施術を通してその足りない部分を補うことで、従来のウエルネスの概念における「健康」の状態に近付けることに力を置いた。

ウエルネス概念のその基本的な考え方は「自分の人生には自分で責任を持つことを自覚し、より幸福でより充実した人生を送るために、自分の生活習慣（ライフスタイル）を点検し、自分で変えなければならないことに気づき、これを変革していく過程」である。このウエルネスの概念は、1961年にアメリカの公衆衛生医で医学博士のHalbert L. Dunn（1896-1975）が出版した“*High-Level Wellness*”によって提唱したものである。従来、健康を意味する言葉であったHealthから「より総合的で新しい意味をもつ健康概念」として論じられたものである。

「ウエルネスの5つの領域」に医療の現状を当てはめると、医療技術が発達・短期間入院・治療成果の上昇、そして高いスキルや専門性を持つ医師や看護師らの存在に支えられて治療が可能になってきたことで、「身体」のウエルネスは安定してきている。その「身体」がウエルネスな状態であることで、趣味や娯楽などを見つけて「生きがい」に生きることもできる。そうすることで、ストレスマネジメントができ、「精神」と「情緒」も安定する。その様子を見る家族らも、

社会も安心して患者本人を受け入れることができることでより良い「環境」が整う。このようにして、現在の医療現場における治療に対する「価値」の評価は高いと言える。この医療における現状はがん患者においても同様だ。がんと聞くと「死」を連想させていた時代と比べると、全国どこでも質の高いがん医療を受けることができるように診療機能など一定の条件を満たした病院を厚生労働大臣が指定した「がん診療連携拠点病院」が各地域に設置され、平等で安心ながん医療を受けることができる体制作りが進み、具体的な治療においてもセカンドオピニオンやインフォームドコンセントの存在から、納得のいく治療を受けることができるようになった。がん患者たちの考える治療に対する「価値」、実際に治療を受けることが出来ること自体の「価値」も上がっている。しかしながら、がん患者の場合、社会生活においての「情緒」、「環境」、「身体」、「精神」の「価値」が上がっているとは言えない。長い月日をかけ、山あり谷ありの治療のステップを踏まなければならない中で、治療の苦しさと通常の生活を取り戻す難しさを感じる。今まで当たり前のように社会に接していた自身の存在に戸惑い、がんにさえならなければと、健康が欠けている自身の「身体」にウエルネスの「価値」を見出すことが出来ない。今後のがん闘病生活を不安に感じ、これから先を見据えることが出来ないことで心のバランスが取れなくなる。社会ががんに持つイメージや、がん患者が社会から向けられるイメージは、必ずしもウエルネスではない。そこで、「身体」の欠けを何らかのツールを使うことで補うことが出来れば、もしくは「精神」、「情緒」や「環境」において過不足なく補うことが出来れば、がん患者の闘病中におけるウエルネスの「価値」を上げることが可能である。

人は自身の「価値」を自身のウエルネスで評価する。どのようなウエルネスの「価値」で自分自身を評価するにもよるが、医療面の充実だけではウエルネスの「価値」が満たされず、「ウエルネスに生きる」ことができているとは言えない。社会生活からもがん患者を支えるために、自他共に欠けている身体と心のバランスを整えてくれる一片を美容は持っていると言える。

研究の方法は、理美容の概念を整理し、研究の構想や考察に必要な諸理論については文献の渉猟を行った。その際、筆者自らが「フィールド経験と理論的世界との統合を手がける実践的研究者」として、個性的でクリエイティブな研究を進めるべく努めた。次いで行ったのは、筆者自らが立ち上げたHappy Beauty Projectの活動を通して、美容術を使ったがん患者へのサポートを行う実践的研究である。具体的には社会実験的手法を用いた。本研究における一連の社会実験はアクション・リサーチの手法で行い、その経過や成果についてインタビュー、会話録音、写真撮影、記述式アンケート・関係者へのヒアリングによってデータ収集を行い、エスノグラフィーとして記述した。

本論文は6章で構成されている。第1章では、研究の枠組みを示し、筆者が研究に至るまでの背景と問題意識、本研究の目的、実践研究へのアプローチに触れ、方法と構成を述べた。第2章は本論文の実践の基となっているウエルネス概念について詳述した、さらにがん患者が置かれている現状についても整理した。続いて第3章では現代社会における理容・美容に関する整理を行ったうえで、美容のもつ社会的役割について、第5章の実践に関わるポイントを中心にまとめた。第4章では、理容・美容における「公共」について、癒し・エンパワーメント機能とパブリック・スペース機能の 2 つの観点から整理を試みた。第 5 章は、筆者自ら立ち上げた Happy Beauty Project が、がん患者への美容施術の提供を行うために設置し、現在も運営しているがん患者専門個室美容室 Ccure-クキュア-において行った実践と、それに派生して始まった CanBe（キャンビー）の活動と商品開発を行った wing wig の取り組みについてのフィールドワークの記録である。また、社会実験で行った5つの活動を整理し、「がん患者へ美容サポートを提供する意義」「関わる人の変化」「がん患者を後押しする美容」という3つの観点から考察を加えた。最終章の第6章においては、美容術がどのようにがん患者に有効かを示すとともに、本研究での課題と展望、筆者自身のキャリアデザインについて述べている。　　（文字数:3501 文字）